

會



報

1960年12月

212

日本山岳会

ロングスタフの手紙と ウキンパーの写真

成瀬岩雄

フットした御縁で手紙のやり取りをする様になつてから数年になるけど、日本文字で云えば素晴らしく風雅な巻紙に、墨色鮮かに水墨の跡もうるわし、と云つた様な感じだ。ただこれだけでは何んの事だか判らないかも知れないが勿論タイプライター等は使わず、どう判断しても万年筆の字ではない様だし日本文字で云えば腰の柔かい筆でスラ／＼と無難作に書き連ねられた様な、恐しく達筆の手紙だ。日本文字でも余り達筆なもの墨絵に近い様な感じもするけど之等は僕には「委細電報」と敬遠せざるを得ないものだがそれ程ではないにしてもロングスタフの筆跡は一口に云えば如何にも「枯れた」ものだ。

それと一度だつて飛行便等で来た事がなく此方にして見れば何しろ相手がヒマラヤの大御所の事だから云いたい時は一刻も早く伝えたいセツカチから航空便に託するのだが、それでも返事は必ず来るには来るが此方が忘れた頃になつてユツクリ船便で来るのだからい所がある。

その昔、学生の頃、山行の旅費を電報で頼んでも態とユツクリ普通便で送つて寄越した親父のあの仕事に似てない事もない様だ。勿論不幸にして未だその風貌声咳に接した事はないけれど、エベレストのベースキャンプでの隊員一行の居並ぶ写真の中の大男の、ブルースとフキンチの間に挟まれてパイプを手にした小柄の彼の顔や、特に昵懇にして居られる横、松方両氏から色々聞いた話からでもその人柄は大体想像ついているだけに如何にも彼らしい手紙だと思えるしそれだけに僕にとつては貴重な手紙でもあるわけだ。

スコットランドの田舎の郵便の定期車が唯一の交通機関に過ぎない様な僻村に余生を送っている彼にして見れば飛行便なんて凡そ「ピン」と来ないのかも知れない。

そも／＼彼がアルパインクラブの会員になつたのはウエストンさんの紹介によるものだ云うのだから日本山岳会の事は当時からも耳にしていた事であらうけど、ナンダコト、マナスの登頂の時やロンドンでのマナスのフィルム映写の時は我事の様に喜んで呉れた事は「会報」にもある通りだ。殊にナンダコトの登頂は彼もそ

の昔手掛けた事があるだけに余程嬉しいと見えて今以て「慶応のヒマルチュリー」登頂お目出度う。秩父宮様には自分が一九〇五年に雪崩危険のために引返したナンダコトが貴会によつて登頂された喜びを知つた時に、アルパインクラブで拝謁の栄を賜りました」と云う様な書出しで来た最近の手紙を見ても常に日本山岳会に対する関心と友情は彼の脳裡から去らない様だ。

その昔、僕はイギリスから取寄せた古本の中に名刺版の一枚の青写真を発見したのだが氷河のモレインみたいな処で休んでいる白髪の人物が如何見てもウキンパーにそっくりなので僕としては何かの機会に誰かに鑑定して貰いたいと思つていた。と云つても日本人でその御本尊に会つた人もないだろうし、それにウキンパーは好んで人と話をする様な性でなく、変人で、むしろ傲慢な態度で、クラブでも一人ぼつちの事が多く、Clubable man でなかつた等と云ふ事は何かの本で読んだ事を記憶していたので愚図々々していると本家本元のイギリスでもそんなわけで数少ないウキンパーを知つて人間もなくなつてしまふ懼れもなきにしも非ずと、内心心配にもなつて来たので最近この青写真をロ

ングスタフに送つて見た処、「左側のは確かにウキンパーに間違なし……保証します……。婦人は彼

本号主要目次

- ロングスタフの手紙とウキンパーの写真……………一〇二
- 第15回国体に参加して……………二
- ラップランド雪の旅……………三
- 上高地公園……………四〇五
- 飯豊山山道絵図……………六〇七
- 苗場信仰登山の覚書……………七
- 銀山平と尾瀬ヶ原……………八
- 会員通信……………ハ

雄国沼に遊んで

礼文島と大雪山

八幡平の旅

小川山越え

◇ 図書紹介……………二〇

◇ 会務報告……………二二

◇ 小集會記事……………二二

◇ 登頂……………二二

◇ 偶感……………二二

◇ 会員の声……………二二

◇ ………………二二

会費お忘れの方は至急お納め願います
(振替東京四八二九)

の夫人……。貴殿のこの Alpine treasure を早速御返しします……」
 つて云う返事が例の如く船便で来たのには僕も欣々躍如の態だつた。

それは、之迄のいつもの手紙にも屢々ある事だったが、語気を強めたい気持ちからであらう、特にアンダーラインをしてある事が度々あつたが此度の場合にも I assure you の下に如何にも僕を喜ばせたのかの様に、力のこもつた太いアンダーライン迄引いてある。

之が差し対談でもしていたのなら恐らく満面微笑を以て「Yes, I assure you……」等と固い握手を返す、あの、外人特有の大袈裟な表情を僕は思い浮べたのだつた。

アルパイン、クラブ、レヂスターによればウキンパーは一九一一年にこの世を去つたのだが、その五年前に結婚したとあるから恐らく一九〇五、六年の頃の写真は撮られたものだと思ふが僕は写真の知識は皆無だから写真を語る資格はないがその頃だつて今の黒白の印画紙みたいなものだつてあつたと思うが何れにしても青写真のウキンパーの写真なんて云うのも時代物らしくて楽しいものだ。
 それにこの青写真は御丁寧にハトロン紙の小型の紙袋に入つて帰つて来た。此方は性来の無精から

この写真を裸で送つたのだが御帰りはこんな丁寧な袋に納まつて来て、それが又よく見るとイギリス著名の釣道具屋の釣針でも入れる袋らしく各地の支店所在地名の上に「The World's Angling Specialists」と書かれた袋に納められて帰つて来たのだからこの彼の行届いた、如何にも大切に保存しておきなさいと云わんばかりの親心の親切さには今更ながら恐縮と感謝の念を抱かざるを得なかつたのだが、そればかりでない、僕をして、年老つたら山登りは止めて釣をしろと、ノーマン・コーリーに云われた……」と語つてゐる彼の回想記をフト思出した事だつた。

ノーマン・コーリーは晩年はスコットランドの、その若かりし頃多くの初登攀のケルンを残した 50 名の岩山を眺める寒村に居を移して釣釣を楽しみ、多くの村人の愛と尊敬を受け、又、遙か訪ね来る若き登山家の訪れを楽しみながら静かな余生を送り、一九四二年にこの世を去つたのだ。ロングスタッフから見れば年令から云つても二廻りも上の、ヒマラヤの大先輩たるコーリーの言を今茲に忠実に守つて同じくスコットランドで釣釣を楽しみながら静かに余生を送り、亡きコーリーでも偲んで

いる事だらう等と僕は勝手な想像をめぐらして見ると僕にはこの袋迄が Alpine treasure になつてしまつた。

「高きはせいゝ千米そこ」だが六十哩に及ぶ連嶺を背追つた内海を一望に眺められ、冬は雪をたたき、風は強いが霧が掛らないので冬の眺めは素晴らしい……とは、いつかの手紙の一節にあつた彼の今のスコットランドの環境だ。

今や八十五才の高齢を迎え、実は今年初めには夫婦相携えて来日すると迄云つて来ていたのだが都合で取止めになつたのは呉々も残念な事だ。頗る元気だとは云つてるけど慢性の気管支炎だと云うのが少々気になる。

その風貌声咳に接する千載一遇の機を逸した事は僕等にとつては大鯛を釣落したにも等しいものだ。

それにしても日本山岳会としても何時迄も定款とかに拘泥する事なく、否、定款を改正してでも斯る斯界の大先輩を名誉会員に推してもいいのではないだろうか。外国人でもどんな入会を認めている現状なのだから……。日本山岳会も今では唯、東の涯の小島の一、山岳会ではない筈だ。
 (一九六〇、十、二四)

第15回国体に参加して

沼倉寛二郎

十月二十二日、熊本市に集合、二十三日の大会開会式は、九州地方でも稀に見る快晴に恵まれ、式場に両陛下をお迎えし、マラソンの父金栗翁のアンカーにより聖火が点火された。

開会式後、全都道府県選手団、役員団五百余名は、バスに分乗、国旗と聖炎旗に埋れた沿道を三時すぎ一の宮町、宮地に到着。

プラスバンドを先導に宮地町へ行進、入場式場の一の宮神社に向う。途中、先年阿蘇山中に不慮の事故で亡くなられた北田正三氏邸前では、故人の写真とともに御遺族の出迎えを受けて胸うたれるものがあつた。

入山式は、甲斐国体事務局長の司式、武田日本山岳協会長、尾関副会長の挨拶、地元代表の祝辞の後、東京代表選手の宣誓、故北田氏の靈に一同黙祷を捧げ、星野技術委員長より注意事項、各技術委員の紹介があつて式を終了。各班ごとに坊中に分宿した。
 十一月二十四日より二十七日まで四日間、(登山行動三日間) A、D の四班に分れて、コース別に行動。阿蘇山を中心とする山稜は

想像以上のスケールで、壮大な美しさに加うるに連日の快晴に恵まれて全選手を一層満足させた。また地元の方々から受けた心からの歓迎は感謝のほかになく、地元役員の献身的御尽力により、予定行事も滞りなく終り、閉会式を終了したことに對し、心からお礼を申し上げたい。

最後に、国体運営については、前年より本会の手から日本山岳協会に移譲され、今回無事終了したことは喜ばしいが、例年のことながら役員団の処遇やオーブンコースのこと等で地元役員を煩すことが多いのは遺憾である。

また運営が本会の手を離れ協会に移行された関係もあり、個人的な事情もあつたことと思うが、本部役員、日高会長の代理として突然参加を仰せつかつた私以外に、本会側から参加者のなかつたことは一考を要するものと思う。

×

▽地方在住会員参加者
 後藤幹次、後藤恵二(山形)、藤島玄(新潟)、保坂隆司(秋田)、佐野勇一(鳥取)、橋本三八(福岡)、亀田与三(石川)、松長晴利(愛媛)、大賀寿二(大阪)、川島慶太郎(高知)、浅野義三(岡山)、清水悟朗(長野)

上高地公園



西岡一矢

(カブトは高橋定昌氏)

中沢義直さんがとつて私にくれたウェストンさんの写真は醜惡な葦のような面をしていた。どうもウェストンさんはこの写真によると好男子でなかつたらしい。しかし私はウェストンさんをみていないから本当のところは横さんか松方さんにきくのほかはない。その初期のウェストン祭に私は藤木さんと一緒に参列した。——その時、この胸像のあたりはいたくみちがくずれていてレリーフのはまつている岩から川までは二間とはなかつた。しかるに今度爰についてみるとみちはひろく立派に整理されて河童橋からこのあたり全く富豪の大庭園の如く綺麗に片づいていた。そしてレリーフの前で二、三のお嬢さんが花を抱えたまま背のびしてカメラに収つていた。——その時のこと、横さんは蝙蝠傘を携えてこられた。山のベテラン、ゆかしい気品があつた。かけ出しがこんな真似をしても何もない。横さんであればこそ一種の風格がにじみ出るのである。山で蝙蝠をもつ可否は別として、他にもうひとり傘を携えて登山する人をあげるなら今西錦司さんがいる。私は曾て屋久島へ梅棹忠夫さんを加えて行を共にした。御承知の通りこの島は一ヶ月に三十一日間も雨のふり通しというところであつたから二人が持参された傘は大層な効果をあげた。私も昔から女学生の小蝙蝠傘一本を常に囊に結べることにより幾多も恩恵を蒙つていた。流石に高山の尾根筋では役立ちしなかつたけれども林中散歩とか狭中での使用には限りなき便利を得ていた。またこの時、尾崎喜八さんに初対面をした。詩人という名からすぐ想像する面影は生白い軟弱な風姿であつた。しかし、尾崎さんは眉の秀でた気品の高いしかも眼光炯々たる小兵なれども丈夫のような、全く私の想像をくつがえしたような方であつた。その日の夕の講演もウェストンさんにちなんだ調子の高い名講演であつた。この尾崎さんに影の如くに付添つていた高橋さんも一きわ秀でた偉丈夫で美髪と銅色の顔は殊にこの人を引立てていた。私が上高地へくるよろこびの一つは全くかくの如き人々にあへるよろこびであつた。此時も村井米子、山下一夫さんなどにあい夜梓川の磯に篝火を焚いて久瀾を叙しつつ座談をした。今夏も梶原信男、中沢義直、大木千枝子さんに偶然お会いして気焔をあげた。

曾て私は三十五年も以前に上高地の今日あることを予言したことを覚えてゐる。されば上高地がこんなに変貌したとてちつとも驚きはしないし、しかも面もしない。しかし、あの時の予言は少しく揶揄的乃至皮肉的であつた。それが思いきや、上高地が国立公園となりそしてよき意味で明るくひらけうまい具合に整理されている。こんな按配なら一層のこと疾く徳沢迄はひらけてしまふとよい。但し明神池では似非神主が金十円也の料金を徴収して池をみせていた。一体これは何だらう。奈良の博物館で国宝の仏像をみるのに十円とられるのはやむを得ないと観念するが、明神池は天下の公園である。その公開の池で十円をとるのはひどすぎる。

なべてみちがひらけて便利になるのがわるいのでなく、自然の美しさをそねて俗化するのがいけないのであるから、その点を十分にわきまをみるならもつとつとひらけてもよい、必ずやがては徳沢も、いや、大滝から常念へかけてのアルプス前衛の山々も上高地並になるのではないか。(自動車は上高地より上流へはいれてはならぬ) 已に立山と乗鞍はそうなつてゐる。御岳がそうなりつつある。今に富士山もそうなるかも知れない。

大正十三年頃の中尾峠は天ペン近くにあつた巨石の隙間からかすかなけむりをあげていた。そして偶然であつたことながら小匹の小兎を叢から追いたてて遂にこれを私は撲殺した。今夏そこに立つてみるとそのけむりを吐いたと覺しき石もなくむろん兎など馳けようはなかつた。志賀重昂先生が山中人をみざること約半ヶ月に及ぶといつたさむしい峠みちには陸統として観光客とハイカーとが絶えずつづく。上りきつた天ペンには小舎があつた。近頃流行の鐘が鳴つてゐた。この管理人は大声をあげて流行歌を唄つてゐた。きちがいだろうか、それとも今の若者はあんなくだらぬうたをばかりなく唄うものなのか、もつともいけなことは、鐘詰の空殻がひとかたまりずつ堆高くそこそこ捨てられて徒らにお山を汚していた。山には初步の美代子さえ顔をしかめて自ら座の回りの捨鐘を整理していた。観光客の心なき仕業と思う。

どの山にも雪がなかつた。アルプスへきて雪がない。それはさむしい期待はずれの山である。ちつともかわつてゐなかつたのは六百山と霞ヶ岳であつた。ずつと前、木曾の神祠峠から松峠へ立つたとき、折からの落日で霞ヶ岳の天ペンに鑑ゆるいかめしい岩壁が夕日に燃えたち蘇芳色に染つた美しさ、こんなに悠遠で神秘的いろをかつてみたことがなかつたのでこの山が今だに忘れられない。人は屏風岩とか前穂の北尾根第何峰とか、ひしめき登攀するが何故この山の天ペン岩が目につかないのであるか、それと以来記録に注意するけれども未だに登つたといううわさを知らない。それとも、私にはそうみえてただで實際は何でもない岩場なのか、こんな山はなお他にも二、三ある。頸城アルプスの北にある鬼のつく何とか山、黒部川の鐘釣山(アソ谷の対岸)? などそれぞれである。

大正四年に一度大爆発して遂に大正池をつくつた焼ヶ岳は大正十一年(或は十二年)にも大爆発して煙は高く天に達しヨナは松

本市にも降った。私はその時丁度鷺羽山におった。大砲を真近にきいたような音がしたと思うと真黒な雲のような煙が天にひろがつていた。それからというもの、上高地へ出る度に焼ヶ岳の登攀を志すけれども未だに機会がない。今度も若い美代子は元気で登りたがつていたにもかかわらず、病後の私は中尾峠の下に立つのが精一杯でついに果たせなかつた。焼は依然としてくすぶりつづけていた。しかし、所詮私には縁なき山である。

河童橋の上に立つと、五千尺旅館は外国のお城のようにみえた。この巨大な宿は何だ、いつの間にかくもでかくふくれあがつたのか、爰の宿屋はいたく儲るとみえて、ひとり五千尺のみではない、徳沢園も新館が次々とたつた。吉城屋も明神館もみんな立派になつていた。国立公園だもの相手が観光のおのほりさんだもの、どしどし儲けてどしどし綺麗な宿に精々脱皮してゆくことである。

上高地では観光客六、ハイカー三、登山者一の比率かな、明神池でもこの比率にあまりかわりはなからう。しかし、徳沢へくるとすつかりかわつて観光客はがらりとおちる。一番気持ちのよかつたのは女流登山家がふえていることであつた。そしてその人々がみんなはちける計りに健康で栗色をした凛々しい顔のお嬢さんだちで全く颯爽と且つ健実な歩調でまた相当に膨んだ重荷を担つていた。それに比べて男の登山者には別に特に好感を抱かなかつた。むしろおかしなのがいた。此頃流行の新型鳥打帽も

私にはおかしい、うすい猿又一つの下半身もおかしい、猫も杓子もビッケル携帯もおかしい、徳本峠を越す人のすくないのもおかしい、徳沢の牧場で矢鱈に天幕を張るのもおかしい、徳沢といえは、爰の牧草は踏みみじられてかみん枯れて土がみえていた。あのひろい青草の徳沢がない、かなしいことだ。その青ももうせん草原で素材の卓子に新鮮な牛乳をぐくぐくとんのんだのはつい先日のような気がするがもう十年もたつていた。徳沢のおやちさんも死んでいった。さむしい。

ついその新村橋はつづれて用をなさなかつた。あんなものはいらない。対岸に越したければ、裾をからげてあのはげしいそしてすきとおるようになきれいな梓川の水がめらめらと青いりんのような焰を川面にあげるその流れに足をふみ入れて渡るがよい。徳沢から上はもう上高地でなく、ここからはもう登山なんだからだ。いいかえれば観光客を対象とする山川でなく登山家に親しまるべき自然なんだから不便な儘でよろしいのだ。

奥又白谷はその名のみを知つていたけれども行つたことはなかつた。今度我等の仲間が永久の眠りの場所を爰に定め、そのしるしとして一基の墓標が建つたので、私も生前自分の墓を知つておきたく、さては今夏の上高地行きとなつたのである。この谷は一言にてつくせば、まあつまらぬ谷といふべきであらう。ただ、その奥の奥に大池があつて爰のみは極めて美しいところとき。茨木猪之吉さんが伊藤洋平さんと爰で

出会つた儘行衛不明になつた因縁の谷でもあつたし、また我等の山仲間の一ひとり福田源五郎君の墓標も此の方面にあることを兼ねてきいていた。白い巨きな石がそう。そうと高くたたんだ墳がどこ迄も続いて遂に松高ルンゼの入口にきて、我等の墓標を発見した。「我等の山友達が永遠の憩をここに」という風のことが書いてあつたように思う。こんな高いこんな荒々しい自然よりはもとと静かな穏やかな草原が木立の中に永久の眠りをとりたかつたけれども仕方がない。やがて、私は死ぬだろう、そうしたとき、今日爰に私をいたわり視力のうせた私を爰迄みちびいてくれた美代子が語つてくれるだらうこともあらう、そのため今日思い出を記念すべくこの墓標の前に二人はカメラにおさまつた。そしてすぐ前を流れる河原で紅茶を沸かしながら憩をとつていと、遙か東に連亘する前山の上に一片の黒雲がかつたと思ふ間もなく沛然として驟雨がきた。見る見るからだを濡してしまつた。山はこれだからこわい。

× ×

明治四十二年、上高地にたつた一軒あつた宿屋清水屋が「山岳」誌上に広告を出している。「上高地は仙境であるから御出でください」というのである。その当時広告を出さねば人が来なかつたその上高地も今日では客をことわらねばならぬ程混雑繁昌する上高地となつてゐる。また、今日では仙境ではおかしいのである。明治時代の上高地は、小島さんがおかきになつた通り地風水火の四元素で造化された大原生林その

儘の森閑とした上高地であつたから仙境であらう。ところが正四年の焼ヶ岳のあの火大爆発で大正池が現出して上高地が現在の高地となつた。それは決して仙境ではなく、よりほがらかな整理された公園風の上高地となつてしまつてゐる。小島さんは明治三十五年に槍ヶ岳登山をしてゐるが、徳本峠の在ることすら知らずして迂回路をとつて梓川べりに出ている。支那に滄桑の変つていくことがある。この上高地はその見本のようなもので四十年にしてその全貌は全く一変してしまつてゐる。こうなるとウエストンさんがいかにしかめ面をしようが辻村伊助さんが浩嘆しようがもう及ばない。それなら一層のことせめて中尾峠へのみちでも大衆がたのしく気持ちよく歩けるようなみちにしてほしい。公園の名に於てもしなければならぬ筈だ。

(三五・一〇・一四)



カクトは山下一夫氏

飯豊山山道絵図

★
藤 島 玄

今年の越後は大豊作であるように飯豊連峰も中央から日高会長一行、楨さん一行、今西さん一行等を迎えて、その山の良さを知っていただき、また小生も九月一日には山都町一ノ木の飯豊山神社の祭礼によれば、かねて所在だけ知っていた飯豊山の元禄古図を一見する機会を得て、知己、眼福の大収穫を喜んでいる。

「飯豊山々道絵図」は絹本着色一巻で、巾約一尺、長約一八尺の長尺物で、絵も字も鮮明で末端には倚藤軒図之図とあり、奥書は紙本で、元禄十二年己卯（一六九九）十月十三日当院廿二世法印有範、改正焉、小原五郎右衛門尉筆画と記載されている。

同社にある維新前の五社権現の本地仏であつた虚空蔵菩薩坐像五軀、金銅仏、地藏山の本地仏であつた地藏菩薩坐像一軀、金銅仏などとともに、飯豊信仰の研究には見逃しがたいものであろう。絵図記載の地名を現在と比較して参考に供したいと思う。

☆
一ノ華表 一ノ鳥居である。
一ノ戸邑 明治初年の地割制度の制定以来一ノ木村となり、一ノ戸川の名だけが残る。こままで山都駅よりバスが運行している。

業師堂 村中にあり高野原の分

牛形木版刷神札 原寸 17 cm × 24 cm



岐点、自動車道路（川入までの林道）基点となつている。高野原は小屋原で小屋は木地小屋ならぬ。業師堂は徳川中期ごろのものか、四方の欄間の墓股の手法が優れているが、業師如来木像もこれ、

児童の遊場となつて荒れている、虚空蔵菩薩像も、この山絵図もこの寺の什物であつたらしい。
牛王小屋 小屋一戸 通称権小屋で、今は小屋はなく巨大な飯豊山石碑があり、当時の一ノ木村全住民の寄進で、傍に大尊があるが近く伐られる運命にある。位置は一ノ戸川の左岸、一ノ木と川入の中間にあたる。

龍山、竜ノ山にあたる。
大鼻岩 大花山であらう。大鼻岩は川岸に近い岩峰としてある。
村杉木地小屋 人家多し、川入部落で村杉はその古い地名であり沢の名に残っている。ここは飯豊信仰と無関係で、祭神も維新親王や山ノ神である。

相小屋 小屋一戸 杉小屋であるが位置不明。
塩涌出之所 塩井で塩釜神社があつたが所在不明。
菴沢但大師菴之跡 庵沢であるが、新道のため以上三カ処の位置は明瞭でなく、訪れる人もない。

小白峰 小白布の文字を当てている。遠山を画いて漠然としているが、シラブが植物であればシラベ、シラビなどとともにシラビンであるまいか。
瀬尾沢不動 小屋一戸 夏期間建てる御沢小屋である。巨大な老杉が林立し不動尊を祀る。

長坂十五里松但州里之中也 小屋二戸 下十五里、中十五里、上十五里ときざざんでいるが、今は小屋はなく、松でなく杉がある。
血ノ池 地藏山頂にある。
地藏権現 小屋二戸 地藏山頂部で夏期間掛小屋がある。この下の横峰にも建つが絵図にはない。
草盛 地藏山と剣が峰基部までの渾木帯を指すらしい。
自是剣が峰
三宝荒神在北方
剣が峰鎮所
弘法大師護摩所
箸ノ王子 仏像あり、草盛からこの間は三つのピークがある岩稜であり、箸ノ王子は三国岳に当り三国小屋は永久建築物である。絵図は奇岩怪石が重畳して、鎖を攀じる信者も克明に画いている。
奥川道 ここより絵図は白雲を漂わせて、その下に左へと、
御手掛坂
吉祥戻し坂 この間沢あり
奥川長坂 と急坂、樹林を画き現在の弥平四郎道を現している。
七森山 前記の草盛と同じく七盛山のほうが当る。阿賀野川沿岸から遠望すると、同高度の突起がむくむくと連なる形容である。
種蒔場 種蒔山で小池がある。
駒ノ原残雪 東面の大又沢原頭の残雪で、夏はお花畑となる。

切合小屋 小屋二戸 夏期間掛小屋が建つ。
出羽国越後兩國道 出羽国は嶺谷、大日杉経由の米沢道で、越後国は十三峠を越して米沢道に合したものであつたのであろう。
玉川 玉川源流の大又沢を総称したものであろう。
草履塚 一書に草鞋塚の名も見え、そのほうが至当のようであるが、ここでは草履である。

老山 草履塚双耳峰の北峰
姥石 仏像あり、姥の石像か、山橋 岩稜の突端であらう。
秘所権現在北方 上中下段のうち中段の隅みを指している。
御前坂 ミサキとも呼称し、最後の花崗岩の砂礫の急坂である。最低鞍部に昔は木造小屋があつたが現在はその跡だけで、絵図にも小屋はない。

一王子 小屋一戸 神社あり。
二王子 小屋一戸 神社あり。
三王子 小屋一戸 神社あり。
籠所 小屋一戸
台所 小屋一戸
四王子 小屋一戸 現在の飯豊山神社の鎮座地にあたり、籠所、台所に相当する小屋が二戸ある。
蔵王権現 小屋一戸
経堂 小屋一戸
護摩所 小屋一戸 この三方所は絵図に相当離れてあるが、実

際は四王子に密接する境内地内の小屋であつたのであらう。その名残か小神社が二、三基夏には配置してある。

牛形残雪 西面の実川源頭の雪田らしく、現在は御鏡雪と総称している。牛形の木版刷のお札を神社では授与している。

五注連王子 小屋一戸 飯豊本山一等三角点二一〇五米、現在は花崗岩のケルンと泰納の鉄剣のみである。

籠山 岩峰に画いてあるが、頂上に近い板状の岩の重りである。

宝珠山 駒形山の位置に記されている。宝珠山の名は東方の切歯尾根の一突起の移動している。

済ノ河原 賽ノ河原で、赤谷道にあたる辺りを通行したらしい。

現在はその位置は明瞭でない。

御田原 御西岳付近の草原を指すのであらう。

大日岳 大日岳二二二八米を指すのか御西岳二〇一二米を指すのか不明であるが絵図は大岩峰を画いているので現在の大日岳であらう。それにしては近すぎるが。

これによると、現在と大差のない登拝路であることは明瞭であるが、同じ道ではないのである。それは当時の登拝時期が二百十日の九月一日すぎであつたからで、台風も去り新穀も成熟した頃はほと

んど残雪を考慮しなかつたから登路は主稜へ出てからもつとも安易な東西の草原の斜面を滑んだのであつた。近代の登山時期が早まるにつれて頂後へと道を移動させたのは極めて近くのことである。

登拝路も比較的古いとされている越後側の赤谷道、玉川からの切歯尾根道もみられないのも、元禄十二年に宥範が改正したとあるから、それ以前の古図が損傷したからであらうから、原図はこれより半世紀も早いものではあるまいか。ともあれ、藩主は領土の確認と防禦のため、住民の逃亡、盗伐などに備えて、山岳信仰の徒に環境の最高点に神仏を勧請させたことは、会津も出羽も同様であつたと思われる。

(三五・九・七)



カブトは山下一夫氏

苗場信仰登山の覚書

小林 智明

苗場山の信仰登山の流れについては、いつかあさつてやろうと興味を持つていましたが、一苗場自身著名な山であり、また信仰登山の山であつたことは、途中の抜川、稲荷清水などの地名によつても推察できるので、一さて山の神の縁起や、開山の時代、先覚者の名の詮索などになりますと、同じ越後でも、弥彦、米山、八海、飯豊などと同じくうちに、その名は知られていながら、沿革についてはさっぱり要領を得ない状態です。

わずかに二、三の書物に散見した記事から得た知識はつぎの通りです。

△その一▽

▽南魚沼郡誌(大正九、三)

「村社」の項より

伊米神社

三俣村字村に在り、創立の年暦詳かならず。明治六年十一月二十五日村社に列せらる。同十二年五月社殿を再建す。

本社奥の院と称するは、苗場山の頂上に在り、口碑に依れば建久

正治の頃、平氏の残党退転に際し木六村に鎮座せる伊米神社を火し此山に潜匿すると共に遷座せしものなり。

★

右文中、木六村とあるは同郡、中之島村大字大木六のことと思いますがよくわかりません。大木六字宮原にある木六神社は八竜権現が祭神です。「温古の栞」によりますと「南朝の遺臣、岩倉義延なる者、当所に来たり神宮となり代々神職をつとめた。」とあります。

△その二▽

▽「神名帳考証」

「越後国佐渡国部」より

魚沼郡式内神社五座

・魚沼神社

・大前神社

・坂本神社

・伊米神社 稲霊、大殿祭祝詞言

尾船豊宇氣姫命、是

稲霊也。日本紀神武

言、粮名為飯稻、武

蔵国稻乃壳神社。

・川合神社

★

右により推測するに苗場の開山は鎌倉時代かと思われまふ。そして此山の信仰登山は、明治の頃にはすでにその盛りを過ぎていたのではないでしようか。

△その三▽

▽越後山岳第1号(昭23・2)

川崎隆章「新雪の苗場山」より

★

○下の芝(一七〇〇米)に「大正四年九月建稲荷大神」と朱入りで彫つた石碑がある。

○中の芝「開窓行者、慶応三年潤四月二日」の石碑がある。

○上の芝「天下之靈觀、鈴木牧之先生遺跡頭領標、紀元二千六百年日本山岳会名誉会員高頭仁兵衛建之、日本山岳会名誉会員大平晨書」とある。

その隣りに、「大山祇尊 明治十一戊寅六月六日当所願主茂木竹次良」の小さな石碑がある。

以上、浅識ながら同好の方々の御参考供したく簡単にノートをしてみました。不備な点を御叱正いただければ幸いです。なお他に小林存氏著「中魚沼の物語」(昭29・11)に五、六頁記載がありますが、いまのところどんな古文獻もこの域を出ていないように思われます。

× × × × ×

銀山平と尾瀬ヶ原

日高信六郎

沈み行く銀山平になごりを惜しむ越後支部、長岡ハイキングクラブの山行に誘われて、七月十六日の昼すぎ、会員中村謙さんと小出駅に降りた。旧知の方々に迎えられ、大湯温泉に向つて車を馳せる。前々日まで続いた豪雨に川はあふれ、小出町は一部浸水する騒ぎで、百名ばかりの申込を断つたが、何とか路が通じるようになったから、主だった十数人だけ水入らずの催になつたのである。

銀山平はすっかり変つた。小出から垣々たる舗装路が大湯の手前から山にかかり、断続する延長十八軒のトンネルを駆けぬけて出たところは、只見川の袖沢の合流点八崎池のところ、池は干され、本流には高さ一五七メートルのダムが出来かけて、既に一部湛水をはじめていた。途中白光岩のところから外に出ると石抱橋に行けるし、枝折峠の辺を越す、工事用自動車みちにもバスが通っている。

この夜は石抱の伝之助小屋に泊り、主人の佐藤父子や銀山の主といわれる八十四才の富永重太郎、この日越後支部から表彰された一

から山の今昔話や熊狩りの話を、湯の谷村長から銀山平の近況を聞き、杏仁子（上不見桜の実）や、マタビの花など珍らしい山菜をさかんに賑やかな酒盛りになつた。宿はそばにも一軒三溪荘がある。銀山平の人家は殆ど全部水没し、僅かにこの辺に数軒残ることになるのである。

発電所の佐藤徹也君たちの骨折りで、ここから荒沢岳へ尾根通しに直登路が開かれ、案に日帰りが出るようになった。

翌日はダムの上手、仕入沢の合流点から発動機船で濁水をわけて廻り、水底に沈んだ須原口を過ぎ、ひとけのない浪洋に上陸した。空屋になつた銀山荘の入口に休業中と立札があるのはひそやかなレジスタンスか。川辺で一浴した温泉も、むかし金山さかん頃のもの、豪快なハヨ止瀧も近く水没するとのこと。沈む道路に代る新道が出来るまでは、舟に依るほかはないが、予じめ湯の谷村の観光課に連絡すれば、村の発動機船で送ってくれる由。これから上手のところどこに点在する小部落は、むかしから戦後にかけて、桧枝岐から移住した人たちが開いたもので、そのねばり強さが窺われる。この日はいささか強行し、三条滝を見て温泉小屋に着い

た時は暗くなつた。途中二、三のパーティに会つただけで、静かな山みちを楽しむことができた。

尾瀬ヶ原は男女紅緑とりまぜて千客万来、湿原にえんえんと渡した材木のうえを歩くのは足をぬらさぬばかりでなく、あちこちうろつて草花をむしらないためにも役立つというらしいのは思わぬ功名というべきか。竜宮小屋から富士見峠に出るあたりは、昨年伊勢湾台風のおおりを食つたおびたらしい倒木に悩まされ、峠からは自動車を通るゴロタ路を降る他に歩道はない。富士見峠下からバスにつめ込まれて沼田に出た。何とか言つても、好天にめぐまれ気の知れた山仲間とすごしてけつこう満悦なのである。（三五・七）



会員通信

カットは上田哲農氏

雄国沼に遊んで

野口末延

仙台の会員登坂信雄氏のご厄介になり、松本熊次郎君と猪苗代から松原湖畔に出て夕刻、中の湯着一泊、早晩磐梯山の頂上に立ち、猫魔山、猫石を経て雄国沼に下り、ここより沼から流れ出る沢に従つて松原湖畔に帰つた。

中の湯は松原湖畔の騒々しいのに比べ、いまだに昔ながらの静かな山の湯として残っているのは嬉しかった。

中の湯から猫魔山への尾根歩きは霧で何も見えなかつたが猫石を下つてから漸く雄国沼を俯瞰できた。

いざ湖畔に下つてみて喜ばしかつたことは、周囲があまりに静かなことで、人影すら見えない静寂な山湖の風景であつた。雄国山、金沢峠、古城峯へとつづく低く緩やかな山波と、猫石、猫魔山に囲まれたこの明るい山湖は、交通不便のため今までも気付かれずにいたのであるが、追々に人が入るにつれ荒らされそうである。

これを防止するために北岸に監視人小舎があつて、キャンプ地の指定、植物の採集の監視などをしているようだが、将来第二の松原湖畔にならぬように気をつけて

貰いたいものだ。

先年、西吾妻から遠く眺めた山湖、その雄国沼に遊ぶことができた、大へん嬉しかった。

(八月六、七日)

礼文島と大雪山

望月達夫

北海道の山脈にやつてきた会員深田久弥氏と小樽から利尻島へ向つて出帆したのは、雲の多い九月十二日の夕刻。同行は北海道新聞のA君と丸善のT君。翌朝香形に着いて先着の袋一平、風見武秀両氏及び旭川山岳会のK氏と合流した。便船の都合で先きに礼文島へ渡ろうと、オシ泊発十一時三〇分の船で礼文島の香深へ向つた。利尻富士は雲にかくれていたが、低い礼文の島山には時折薄陽がさしていた。

香深から東海岸を内路までトラックに便乗し、小学校の脇から礼文岳を目ざして、思つたよりよい路を登りはじめた（午後二時二〇分）。間もなく眺望がひらけ、やがて鷹松があらわれ、一時間四〇分で標高五〇〇米にたらない一等多三角点のある山頂に達した。頂は南北に長く東西はかなりの傾斜をもっている。幸い北と東とが晴れていて、上泊、久瀬湖、オシヨナイ金田ノ岬が見え、アワビコ

タンの南へ張り出している見事な絶壁の先きに海馬島が望まれた。人ツ気のない北辺のささやかな頂きに、七人の一行はすっかり喜び合つてゆつくり休んだ。

コケモやゴゼンタチバナの実のきれいな往路を戻り、途次雲間に現われた利尻富士を賞しつつ、内路からトラックで北上する。薄暮の久種湖とオシヨンナイの浜辺は印象的な光景であつた。香深に泊る。

翌十四日、午前中再び船泊まで行つて久種湖付近の写真を撮り、一旦香深に戻つて、さらに桃岩の頂から西海岸を瞥見、わずかに咲きのこつていたレブンウスキソウを見出し、地蔵岩の奇景に接し、元地の古い番屋でとりたてのエビ、イカ、ホッケをご馳走になり、十二時半の船で利尻島へ。船上利尻富士は高曇の空にそぼ立つて見えた。オシ泊に上陸後天候悪化の報を知つて、時日に余裕のない僕とT君は深田氏らを利尻に残し稚内経由で一旦帰航した。

それから数日後、利尻に登り十勝、美瑛をすまして旭川へ戻つた深田氏から連絡があり、九月二十三、四日は大雪山の黒岳石室にいる予定だから、来られたらいいしやいと云つてきた。

それで層雲峡から登つて、また

往路を戻るのも知恵のない話なので、二十四日に黒岳へ着く予定で二十三日は勇駒別の温泉に一泊した。(同行は同じ店のK君) 二十四日はひどい濃霧と時々ふる雨のなかを姿見の池の少し上まで登つたが、雨がひどくなつたので遂に姿見で寒い一夜をあかすことになつてしまつた。

二十五日、昨日よりはよくなつたがまだ西風が強く、ガスはうすれていない。とも角旭岳まででもと新雪に薄化粧した山肌を登り出す。風が強いのと寒いので休みなしに旭岳の三角点に達した。旭岳の頂は既に初冬の姿でかなり寒むかつた。東の方はガスがはれていそうだし同行の他のパーティもあつたので、北海岳を廻つて黒岳へ向う。間宮岳を越えると風も少しはおとろえ、東方北方の見通しがきいて、新雪をつけた山肌が美しく、お鉢のそこ、ここにはナナカマドの紅葉が血のように赤い。美が原へ下つてはじめて腰をおろして休み、赤石川の源流を二つ渡つて少し登ると黒岳石室だつた。姿見の池から四時間。

深田氏はすでに烏帽子岳から赤岳の方へ出発したあと。層雲峡で会うこととして桂月岳に登り、ニセイカウシニベから武利岳へ続く山波や遙かに阿寒の山々を眺

め、黒岳から層雲峡へ下る。尾根をかざつたダケカンバの黄葉は、内地では見たこともない絢爛たる美しさ、さらに右手赤岳よりの山肌も紅葉とエゾ松、トド松との緑のとり合わせが何とも云えず美しい。途中でさんざんあられたにたかれたが、層雲峡の湯で汗を流した頃は、晴れ上つた空に新雪の黒岳が牙のように聳えていた。

(一九六〇年九月)

八幡平の旅／詠草

小林 智明

九月下旬の休みに、八幡平の諸湯を歩いてまいりました。二十三日玉川温泉に泊り、翌二十四日焼山峠、もうせん峠、後生掛湯、燕ノ湯、八幡平頂上とたどり、藤七温泉に泊りました。

ガスと雨の中を一人でゆつくり歩いてまいりました。

岩手山の大観は、二十五日朝、見返り峠付近より、ちよつとの間に眺めることができました。

×

八幡沼に秋おとずれて
ナナカマド きれいな実の
色さえにけり

山の上の 湖のおもては
さむぎむと 雲をうつして
陽にかけりおり

たけひくき オオシラビソの
樹の海を 霧ながれゆく
沼のべのみち

冬の日に 兎もみるか
道標の 赤き鉄板
風に鳴りおり

(八幡沼)

まなはるか 岩手山みゆ
頂きを おう雲間より
陽のもるもみゆ

(見返り峠)

小川山 越え

池田 光二

信州側の下降路が判らぬままに、用心して金山を五時に出発する。月明りから空が白み、やがて陽の昇る頃には、富士見平で、荒い岩肌にまだらな紅葉を散らした瑞牆山を眺めていた。朝食を済ませ、大日小で金峰の道と分れて八丁平に入る。小川山へはこれから緩い尾根を概ね忠実に北行するわけだが、この辺りは暗い平坦地でもとすれば進路を見失う。倒木を一つ越すと踏跡はもう定かでない。ただ幸いなことに小さな県境

標識の杭が数多く埋め込まれてゐるのが手掛りである。時折岩稜にかかる視界が開け、又ひそやかな林間を進む。こうした繰り返しを何度か重ね、金峰を眺め、時にはみづがきを見返りしつつ、小川山頂に立つたのは丁度正午であつた。

饅頭型の木々に覆われた穏やかな山容であるが、二四〇〇米の標高は流石に高く、国師、金峰、瑞牆の眺めは美しく、さらに野辺山ヶ原を通して八ヶ岳、南アルプスと、南面の眺望は捨難い。

ゆつくり休んで信州側へ下る。西方への切り開きを進むと、道はおのづから北へ転じつつ樹林の中をジグザグに急降して行く。最初私どもは県境尾根を西に向つて鞍部から北に折れ、小川沢に降るようには予想したが、道は山頂から北々西に派出する尾根の左側について降つてゐる。しばらくして右側に岩の瘤が一つある。之に上ると小川山から北に向う尾根と、高登谷山の尾根に挟まれた小川沢の、細長い北向きの谷あい原野を通して、千曲川と更にその後ろに天狗山、男山といった山々が望まれる。

さらに林間を降る。苔に埋つた軟いクッションで、下生えも少く歩きよい。一時間半で沢に出合

う。道はこの先暫く行くと倒木にかき消される。引き返して沢を降る。倒木で見た目はひどいが、案外に降り良い。頃合いの石を伝つて、殆ど足を濡らすこともなくドンドン降る。時折沢をよぎつて木馬道が現れるが、途中で潰えて殆ど使えない。左岸に不明瞭な踏跡を見出し、やがて車道の折り返し点に出合つた。ここからは信濃路らしい牧歌調のだら／＼下りをひたすらに進み、途中の牧棚も遠慮なく乗り越えて、早朝からのアルバイトに足の重みが増して来る頃、ようやく梓山街道の小川口バス停に出たのは午後六時であつた。(十月九日、木暮祭の翌日。同行、野口末延、吉田喜雄氏)



図書紹介

カットは上田哲農氏

The Alpine Journal Vol. LXV. May 1960. No. 300.
マイク・ハリスとジョージ・フ

レイザーが頂上を目指したまま行方不明となつたイギリスのアマ・ダブラム遠征は、エムリン・ジョーリンズによつて本号の巻頭に収められているが、挿入の写真によつても極めて困難な登攀のさまがしのばれる。それによつてオーストリ隊のダウラギリ(一九五九年)がF・モラベックによつて綴られていて、ここにも見事な写真が六葉添えられている。

ブリティッシュ・コロンビアのパール山脈にあるブガブー山塊のことは、曾てロングスタッフの本で読んだ記憶があるが、最近の収獲についてM・ウォードが書いている。

一九五九年に行われた英軍登山連盟の遠征は、カラコラムのチョゴルンマ氷河に近いケロ・ルンマ及びアルチョリ氷河源頭の山々(最高二、〇〇〇フィート)を目指したもので、リーダーはH・R・A ストレツサー、パキスタン軍から三名が加わつた十五名のかなり大きな隊であつた(ストレッサー記)。また同年バトウラ・ムズターグに出された小遠征は、この山群の主峰二五、五四〇フィート峰の登頂と氷河及び地質調査を目的としたが、ポーターとリエゾン・オフィサーがよくなくあつたため成果を収めていない(J・I・

エドワーズ記)。

前号によつて中央コルディエラの一章があり、少しかわつたものとしては、古いヒマラヤニストでもあり、シユタイクアイゼンにその名を残しているオスカ・エツケンシュタインの小伝がある。一七頁に亘るもので夫妻の写真もあり興味深い。またピレネー山脈のパイオニアであるC・パッケやラッセルのことを述べた一章もある。

エクスペディション欄には、アンデスの記事の他に、V・アパラコフ(ソ連)等のパミールのマウント・ヴオロシロフ(二一、六六四フィート)の初登頂、ゲイ・ド・モンテノ(イタリア)隊のカンジュット・サールの初登頂、F・マライニ等のサラグラールの初登頂の記事の他に、C・コガンの死やわが福岡隊の全員遭難の誤報なども出ている。本文一四二頁、写真三四葉。(望月達夫)

針葉樹 十二号

一橋大学山岳部

戦後二冊目の部報である。編集後記にも述べられているとおり、戦中戦後十五年のプランクをうめて出された十一号とくらべ、大変余裕のある編集ぶり、針葉樹本

来のあじわいをよく表明して充実したものとなっている。

昭和三十年から三十四年度までの行動を積雪期の合宿を主にして要領よくまとめている。内容は鹿島槍天狗尾根と北壁ピーク・リッジ、明神岳東稜、北岳バツトレス、白馬岳猿倉台地を中心としたバリエーション・ルート、槍ヶ岳から極地法による奥穂高登頂、劔岳早月尾根、南アルプス北部縦走、赤谷尾根から劔本峰・毛勝山登頂、燕岳から蝶ヶ岳縦走、早月尾根より劔岳頂上周辺のバリエーション・ルートと冬、春・シーズにわたる合宿の成果が報告されている。大変生きわよくまとめられているが、ただこの報告をよんで、昭和三十一年三月の明神岳におけるスリップ、三十二年十二月の北穂高谷で第三尾根登攀から引返し風雪の中をC沢より収束など、大事にはいたらなかつたにせよ、気にかかるものも散見する。

本号で特に注目されるのは、ペルー・アンデスのコルデイエラ・ワイワツシュについて中村保氏によりくわしい紹介が行われていることで、これまでの針葉樹にみられないものである。このような努力がようやくその実をむすんだというであるが、その成功を祈つてやまない。

学生のこしらえた部報としては大変立派なものである。(山崎) 昭和三十五年七月一橋山岳部発行、写真三葉、二九四頁、希望者は都下北多摩郡国立町一橋大山岳部へ実費送料とも七百元をそえ申込めばよい。

山刀 十四号

飛騨山岳会

笠ヶ岳東面壁特集と銘打ち、五ヶ年にわたるその成果がくわしく発表されている。

おすすめすの北アルプスでもそのにぎわつているのは、いわゆる観光業者によつて宣伝されているところだけではないかと思う。現に筆者もこの夏穂高に出かけ、某所(特に地名を秘す)にキャンプ・サイドを求め、約四十名の学生と共に合宿をやつたのだが、人つ子一人会わない昔ながらの穂高をそこに見出して大変気持ちよかつた。

本号でくわしく紹介されている穴毛谷を中心とする笠ヶ岳の東面などもまさに北アルプスの秘められたパラダイスといえるだろう。こうした未知のところへ情熱をかたむけ、その開拓を行っているこの山岳会の人たちの努力を大いにかいた。その紀行文にはかなりギコチなく読みずらいものもある

が、今後ともこうした未知の北アルプスの開拓に意を注げば、地元の強味を大いに発揮出来るであろう。

(山崎安治)

昭和三十五年十一月飛騨山岳会発行。三十ページ、地図二葉、非売品。

マナスル

一九五四〜五六

本会編になるマナスル報告書に對する海外からの反響については会報紙上に再三にわたり報告しておいたが、このたび最もよく理解者の一人であるアルパイン・クラブのウィルフリッド・ノイス氏から、さきにジオグラフィカル・ジャーナル図書紹介欄に書かれた書評を補足して、次の様な書評を送つてきた。

I only wish I had been able to review the book more adequately. It was a most impressive volume, beautifully illustrated, and also found most impressive the organisation which enabled you to get two ropes to the summit with such apparent ease and safety. Please at the same time accept my warm, if belated, congratulations on that feat.

(松田雄一)

FOUNDED 1905



日本山岳会
JAPANESE
ALPINE CLUB

ハカットは佐藤久一朗氏

会務報告

十一月理事会 十日ルーム

▽理事折井、渡辺、浜野、太田、金坂、木下、田村、徳久、川上、加藤、古沢、高橋、村木、津田、西支部長、池田石川支部長、藤木顧問

▽議事と報告

①京都大学士山岳会創立30周年祝賀会について (折井理事)
②日本スポーツ賞(読売新聞社)授賞候補者依頼について (折井理事)

(折井理事)

・慶応ヒマルチュリ隊を推薦
③国鉄スキー・スケート旅客対策協議会(妙高高原) (折井理事)
・信濃支部長高山忠四郎氏に出席を依頼。

④登山指導者講習会(富士山、文部省・日本岳連共催)の本部側講師派遣について (折井理事)
・横、辰沼、徳久、石島、山梨支部より三井、百瀬、齊藤、丸山、山梨県警秋山氏。

▽三月、西穂高登山技術指導者講習会講師の追加委嘱について

・金坂理事を委嘱、
▽明年度、高校生登山技術講習会について (浜野理事)
・七月下旬、立山周辺
・教員を中心に実施したい
▽石川支部のガネツシニヒマール遠征希望について

(池田石川支部長)

▽定款一部変更認可について
・第六條、入会金について
・第七條、入会手続について
・第十三條、評議員定数変更について
右、9月30日付認可

▽昭和36年度予算編成について
▽会員調査カードについて
▽会費納入状況について
(以上四件、太田理事)

▽関西学院大ペルー・アンデス登山探検について
▽大阪市大のランタンヒマール遠征について (村木理事)

▽小集会、雪崩のシンポジウム開催について (高橋理事)
・11月14日(日)、体協会議室
▽年次晩餐会について (高橋理事)
・12月6日開催予定

▽高校生登山技術講習会報告書の完成について (川上理事)
▽現地小集会
・本年は福島支部が担当
・場所、吾妻山
36年1月18日(土)〜19日(日)に開きたい。

小集会記録

第二〇九回 十月二十四日(月)

講演(1) ヒマルチュリ登頂

講師 田辺寿氏

講演(2) アビ登頂
講師 津田康祐氏

(講演要旨別記)
参会者 五十一名
小集会講演要旨
十月二十四日

アビ登頂

講師 津田康祐氏

アビ(七一二米)はネパールにあつてインド・チベットの三國境に近く、特長のある山として世界の岳人より注目されていた山であり、特に一九五四年のイタリイ隊の遭難はヒマラヤ登山史上に忘れる事の出来ない悲惨な記録を残し、その登頂すら確認されていません。まことに及んでいたのであります。

この地方への探検は、これより前英国のタイソン等二、三の隊が入山しているが、本格的な登攀もされず、勿論日本隊としては全く未知の地域でありました。(一九二七年、長谷川伝次郎氏のカリ河遡行、カイラス巡礼の旅があるが)

一九五四年のイタリイ隊は当時七十一才のギリオネを隊長とする四人のメンバーに、マナスル登頂で最も日本人に親まれているガルツェン・ノルブをサードとする三人のシェルパより成るライト・エキスペディションで、彼等はチャムリヤ谷を通過してアビの南面より登頂を試みたが、大障壁に阻まれ、止むなく引き返し、途中一名の隊員は河に落ちて行方不明となつたが、屈せず、ラプラ峠を越えて北西に廻り、アビ氷河にベース

・キャンプを設け、順次にキャンプを進め、高度約六〇〇〇米に第三キャンプを建設した。

ギリオネはもう一つキャンプを上につける事を主張したが、既にモンソーンの最中でもあり、あせり気味であつた隊は無理に一気に登頂を試みたが、結果は悲劇となつた。

第三キャンプを二人の隊員が出発し、暫くして隊長とガルツェンが後を追つて、まもなく二人に追いついた。そして高度約六五〇〇米で隊長は引き返し、三人は頂上に向つた。途中隊員の一人ローゼン・クラント博士は高山病に悩まされ運れてしまつたので、もう一人の隊員バレンギーとガルツェンの二人で尚も登り続けたが、暫くして下を見ると、這うように登つて来る博士の姿を見て、ガルツェンはこれを見守るため降つた。そしてバレンギーただ一人頂上に向つた。ガスは四辺を蔽つていたので、その切れ間からかすかに頂上に向つてバレンギーの姿を見つけたが、そのまゝ彼は永遠に帰らない謎となつた。そしてガルツェンはローゼンクラントを助けながら次第に降つた。二日目のピバークの時ローゼンクラントは亡くなり、ベルクシュメントに遺体を葬つて、ガルツェンは単身降つたが、既に第二第三キャンプは撤収されて居り、漸く第一キャンプにたどり着いて九死に一生を得たのだが、その当時の思い出を語る彼の悲壮な一言一句の中には今回の我々のアビ遠征に寄せる強い決心と復讐の念とが、燃え盛つて居た

事は否めない事実であつた。またその半面登頂の喜びが人一倍大きかつた事も、彼のあの登頂後の喜びようによつても窺ひ知る事が出来た。

今度のアビ登頂の幸運は次の三つの要素を無視する事は許されない。勿論多くの先輩方の御指導と御援助があつたればこそであるが、先づ一つにはガルツェン・ノルブを我々の隊員として迎える事が出来たこと、また一つにはインドのインナー・ライン（国境特別保護区域）を通行する特別の許可を与えられたことで、最終的には天候が総てを解決してくれたものと言わざるを得ない。

さて我々のアビ遠征はスタートまでに紆余曲折はあつたが、同志社大学創立八十五周年記念事業の一つとしてぜひ完遂したいという決意から、あらゆる障害を克服して、一路邁進する運びとなり、本年一月二十六日渡航審議会を外貨の枠も決定し、三月十四日神戸出港までの短時日に総ての準備は急速に進められ、出発する事が出来たものの、後に残る大きな負債を山岳部長初め残留の皆様が背負わせて出発した苦痛は堪えられないものがあつた。

ヒマルチュリーに向う慶応隊、ビック・ホワイト・ピークを目指す東海岳連と我々の三隊は、期せずして神戸港を後に香港より飛行機でカルカッタに着いた。我々は北西ネパールに廻らねばならない関係もあつて、先づ二名がカトマンズに飛んでネパール政府やヒマランソサエティとの折衝をして

再びカルカッタに帰り、ガルツェンを初め、三名のローカル・シェンパと共に三月二十八日カルカッタを後に約二屯半の荷物を汽車に積んで、終着駅タナカブールへ向つた。既に先発の寺坂隊員はタナカブールでリエゾン・オフイサイのラナと三名のシェンパ、それにリエゾンのサーバント一名と落合つて更に自動車で十二時間余のピトラガールに先行していた。

四月四日、全員ピトラガールに集結したのであるが、ここから約六〇杆先のゴリ河以北は所謂インナー・ラインと外つていて、チベットの国境まで外国人は許可なくしては通行を許されず、止むなく停滞して当地のインナー・ライン警備司令部に交渉することとなり、約一週間日参して許可の早期解決を計る一方、当司令部は在ニエーデリーの本部に無電で許可方針旋の勞をとつてくれ、我々もニエーデリーの在印日本大使館に打電して側面援助の申し入れを依頼する等、八方手を尽したが、終に待ちきれず、四月九日、隊を二つに分け、一隊は隊員五名とシェンパ三名、苦力一名で、最小必要限度のキャラバン用具を背負つてネパールの国境に、他の一隊はガルツェンを率領し、ラナと残るシェンパで荷物全部をインド側を通つて両隊はカリ河の兩岸を北上、途中橋毎にお互いに連絡を保つ事を約して出発した。

荷物輸送するガルツェン隊はアスコットの先まで自動車、あとは苦力とミニール（馬の一種）に荷を運ばせる。我々は各自重荷を

負つてネパールの国境カリ河に出て、ゴリ河の合流点近くで、決死のカリ河渡河を執行、危うくインナー・ラインを免れてネパール領に移り、対岸インド巡礼道路の垣々たる道を渡りしげに望みながら三々五々カリ河を遡行する。ダルチュラにて待望のインナー・ライン通行許可の報を得て、勇躍インド側に渡り、キャラバンを再編成の上全員巡礼道路を国境のガビヤンに進めることができた。そのときの喜びは何よりも大きく、もしネパール側をアビ氷河まで行かねばならぬとしたらどうであつたらう。その難路に比べ、ここで約二十日間の日数の節約ができたことが登頂の機会を我々に与えてくれたものと云つてよい。

四月二十日、高度約四〇〇〇米にB.C.を設け、第一C、第二C、第三C、雪、霰、雷の日も屈せず、一日の休みもなく、順調にキャンプを進め、高度馴化のため、一旦B.C.に帰つて一日静養し、登頂に万全の態勢を整え、五月九日（平林・ガルツェン）、十一日（津田・寺坂）と両日登頂に成功し、ガビヤンに降つて後一週間、ナンパ、ティンカルの両隊に分れて付近一帯を偵察し、帰路もインナー・ラインの通行許可を得て、全員無事に七月中旬、帰国したのであります。

× × ×

LIST OF NEW BOOKS

25 th OCT. 1960

1. APPALACHIA :
march 1960.
april 1960.
may 1960.
june 1960.
(covering June and July)
2. THE JOURNAL OF THE MOUNTAIN CLUB OF SOUTH AFRICA
1958.
1959.
3. ANUARIO DE MONTAÑA
4. ÖSTERREICHISCHE ALPENZEITUNG
nov./dezem. 1958.
jān./feb. 1960.
märz./april. 1960.
mai./juni. 1960.
juli./aug. 1960.

5. CINQUE SPEDIZIONI GLAPPONESI.
6. MITTEILUNGEN DES DEUTSCHEN ALPENVEREINS.
oktober 1959.
november 1959.
dezember 1959.
7. BULLETIN DU CLUB ALPIN BELGE
No 1 mars 1960.
No 2 juin 1960.
8. DE BERGGIDS
januari 1960.
maart 1960.
mei 1960.
juli 1960.
9. JUGEND AM BERG
dez. 1959.

10. RIVISTA MENSILE
Vol. LXXIX-N 5-6 1960.
11. LA MONTAGNE & ALPINISME
No 27 april 1960.
12. ANNALES 1958 DU GROUPE DE HAUTE MONTAGNE
13. THE ALPINE JOURNAL
november 1959. No. 299.
May 1960. No. 300
14. THE NEW ZEALAND ALPINE JOURNAL
Vol. XVIII 1959 No. 46.
15. THE AMERICAN ALPINE JOURNAL
Vol. 12 No. 1, 1960.
(係 徳久珠朗・大橋晋)

海外登山隊並に

南極観測隊歡送迎会

▽日時、十一月八日(火)六時

▽場所、ポールスタット

(新丸ビル地下)

▽出席者氏名

・慶応大学ヒマルチュリ隊

宮下秀樹、中沢公正

・早稲田大学マッキンレー隊

吉阪隆正、鬼頭万太郎

山本 晃

・明治大学マッキンレー隊

交野武一、高橋 進

土肥正毅

・同志社大学アビ隊

寺坂元雄

・第5次南極観測隊

村山雅美、川崎 巖

草刈信行、渡辺陣行

×

・鶴岡元之助、高木菊三郎、相沢

裕文、日下田実、松方三郎、吉田

竹志、杉山孝、見学玄、折井健一

佐藤隆太郎、藤島敏男、佐藤テル

武藤 晃、竹田吉文、中山中右衛

門、芳野越夫、吉沢一郎、長沼真

澄、木村規志、山口俊輔、加治甚

吾、山崎安治、川井耿子、大森藤

政、佐藤久一朗、松本熊次郎、青

柳 健、松田雄一、神谷恭、牧野

衛、小原勝郎、三田幸夫、諸岡一

次、大島永明、武田久吉、青木

昇、山下一夫、入沢文明、中村純

二、村尾金三、森 敦彦、村井米

子、関根吉郎、広羽 清、初見一

雄、平柳一郎、川村博道、島田

巽、島 澄夫、入沢郁夫、太田

敬、金坂一郎、筒井計男。

以上六十六名。

日高会長ネパール出張のため、

代つて松方副会長から挨拶があり

歓迎、歡送の辞が述べられた。

なお席上、吉沢一郎氏から一橋

大学南米遠征の計画について報

告、佐藤テル氏からニュージーラ

ンド遠征についての挨拶がそれぞ

れ行われた。

ここ近年、海外遠征隊の数はあ

まりに多く、名前を覚える暇もな

いほどで、そのため司会はずんや

わんやでした。(高橋 進)

ヒマラヤン・ニュース

トリヴオール初登頂

この度、カラコルムのサルトリ
地区へアングロ・アメリカン・エ
クスペディションを指揮して入つ
ていたウィルフリッド・ノイス氏
から、松田宛に届いた私信による
と同隊は標高二五、三七〇呎のト
リヴオール(Triol)に登頂した
模様である。手紙の内容は簡単に
詳細は不明であるが次の様なもの

である。

I found the Karakoram very
fine, and the Peak we climbed,
Trivor, a mountain of 25, 370
feet, a magnificent one. But
the conditions of travel in Pa-
kistan at the moment are diffi-
cult, and the expense enormous.
(35・10・2日付 Surrey 発)

35年11月

新版5万分ノ1地形図発行状況

<一部修正>

◇既刊

葦崎、鯨沢、身延、市之瀬、大河原、赤石
岳、小田原、熱海、御殿場、沼津

◇近刊

田島、那須岳、塩原、矢板、針生、糸沢、
小林、桧枝岐、八ヶ岳

(国土地理院、調)

<全面修正>

◇既刊

黒部、立山、五百石、白馬岳、日光、男体
山、燧ヶ岳、追分、藤原、四万

◇近刊

大町、信濃池田、松本、槍ヶ岳、上高地、
東茂住、船津、越後湯沢、苗場山、岩菅山
川治、小滝、泊

偶 感

岩 永 信 雄

山岳会の「会報」が、当時会員
であつた浦松君の提案で、昭和五
年十月に第一号が呱呱(こ)の
声をあげてから今日に至るまで、
三十年間発行しつづけたことは、
その間の編集者の苦心のほどを推
察して、心から「ご苦労さま」の
一語を呈するとともに、第一号か
ら継続してみて会の変遷の甚だし
きを思い、ここに紙面の一部を借
用して、近時の偶感を述べてみた
い。

× ×
先ず、会報について、最近の海
外遠征ブームの影響により、毎号
の記事はほとんどこれら関係記事
によつて埋められ、国内記事は一
方の隅に片付けられている現状の
ように見受けられるが、「日本」
山岳会の会誌であれば、会員の大
部分は国内の山岳を対象としてい
るのであつて、会報記事としては
国内記事を主体に編集されんこと
を切望するものである。

また会報発行の主旨が会員への
速報機関紙である点を考慮して、
その一部に、かつて冠さんが第一
〇三号で提案された「会員の声」

欄を復活し、広く会員の希望、抱
負を聞き、会員相互の親睦をも深
めるようにしていただきたいもの
である。

次に集会について、これは日本
人一般の通弊であるが、小集会等
における開会時刻の遅延は定例の
ようであるが、これはぜひ改めて
いただきたいものである。

さらに小集会には、役員諸氏は
努めて多数出席されるようお願い
したい。

最後に、ルームの図書備品等の
管理についても申述べたいことが
あるが、次の機会に譲りたい。

(三五・八)



カットは高橋定昌氏

会員の声

本稿は、会員カードの通信欄から採録したものです。通信を寄せられた会員の方々に感謝するとともに、今後多くの方が会へ通信をお寄せ下さるようお願いいたします。(編者)

与野市 林 悌助

◇親しい山友達が地方に分散したり、こちらが老境に入ったりしましたので、懐しい甲信の山々にも全くご無沙汰していますが、内外の山岳書だけはつねに楽しんで居ります。

横浜市 永原輝雄

◇終身会員ということで会報をはじめ毎々貴会発行の刊行物ご惠贈に預りお礼申し上げます。

時たまの投稿でわずかに感謝の微意を表わすにすぎぬ現状、会員として酬ゆるところ少なきをかくつものであります。

富山県 中島正文

◇再入会の方に旧バッヂ番号を差上げるのは、どうかと思う。再入会の年月日は記入の要あり。昔はバッヂを紛失しても番号が変つたものです。高頭先生がそうでした。念のため。

新潟市 藤島源太郎 (玄)

◇カード・システムと、会員名簿の県別編集、この二つは私の持論、やつてみなさい。特に会員名簿を県別にすると驚くほど多種類の効果が得ます。

東京都 川崎隆章

◇昭和六年、山と溪谷社が芝御成門の小さい事務所に創立されてから、ほど遠からぬ虎の門のビルの上岳会ルームから主事の塚本繁松氏が時々遊びにみえた。

僕が山岳会に入会したのは昭和十年後と思うが戦災で記録を失い、よく覚えていない。

それにしても空襲中、会の書類をザックに入れ、移動しつつ、それを守り通して、不幸病没された戦時中の地下足袋姿の塚本氏の口ヒゲを貯えた風毛が偲ばれる。

仙台市 伊達篤郎

◇今年には宮城県岳連創立十周年を迎えますので、十一月下旬、記念行事を計画、目下加盟団体六十有餘。

ピッケルの山内東一郎翁、元気に喜寿の祝を迎えることとなりました。

八月二十九日、横さん、三田さん、御来仙でヒマルチュエリの報告会を盛大に挙行。

東京都 吉田 薫

◇日本の山の汚いものにはいつも嫌な気がいたします。山岳会でなんとかならないでしょうか。

岡山県 岸本伍郎

◇今夏、中央アルプス駒ヶ岳で行われました高校生登山技術講習会では大へんお世話になりました。生徒たちは勿論、我々教師側も得るところがあり、感謝して居ります。

茨市 三浦一郎

◇当市岳連の行事の主なもの、市民ハイイク、市民スキーの会、映画会、展覧会等で、遭対としては遭対組織の検討、各種技術講演会ですが、将来は高水準の技術研究もやりたいと思います。そのときは会員諸兄の協力をわずらわすこととなりましょう。

豊中市 内山正二郎

◇会員名簿は少なくとも年一回は出すようにしていただきたい。名簿の古いものは役に立ちませんから。

茨城県 笠井 篤

◇会報を毎月の発行になりませんか。内容にレポートを沢山盛り込むこと。海外ニュースを出来る限り

り知らせていただきたいと思ひます。

今市市 神山隆之

◇栃木県に住むものは東京支部に所属すると思うのですが、支部の方々と顔を会合することができないのは残念です。なにかの機会に親睦を計つていただければ幸甚です。

福島県 大槻 脩

◇本部で行われている集会、一報告会や記録映画会等一を地方へも回していただきたい。会報に図書紹介のあることは良いと思います。

新発田市 佐久間淳一

◇地方会員は本部の集會等に出席の機なく、会誌、会報のみが唯一の会員たるのしりとなつています。地方会員優遇のため何等かの措置をお考え下さるようお願いいたします。

新潟県 五十嵐 力

◇飯豊連峯、胎内川口に新しいコースが完成。中条町→胎内、頼母木合流点までは、工事の車に便乗でき、そこから門内岳まで約七、八時間の行程、連峯中もつとも良いコースだと思います。

◇一九六一年版山日記◇

本会編集、新年度山日記(26輯)が刊行された。定価二五〇円。

会員一割引、全国気象台測候所一覽、全国山麓バス連絡先一覽が追加された。なお前年度は刊行二十五周年を記念して、会員に無料配布したが本年度は行いません。

◇山岳第五十五年発刊予告◇

「山岳」次号は予定を大分遅れましたが左記内容をもって目下印刷に回しておりますので、もう暫らくお待ち下さい。

一、二の原稿がおくれたため刊行が遅れましたことを、早く原稿をお送り下さった方々に対し、特にお詫びする次第です。

—主要記事—

- 村木潤次郎 ヒマルチュエリ
- 慶応山岳部 ダウラギリ偵察
- 竹田吉文 ベルー・アングス
- 山田哲雄 ランタン・ヒマール
- 加藤秀木 ガウリ・サンカール
- 山崎・大塚 冬のソロクン
- 中村純二 奥峽湾偵察(南極)
- 高野鷹蔵 茨木君の憶い出
- 昭和三年冬の遭難報告
- 追悼、ヒマラヤ展の記、会務報告、英文梗概
- A5版約一八〇頁 写真三〇葉 地図一〇葉 「山岳」編集委員

(二一〇号訂正)

日本人の記録によるヒマラヤ登山年表

34、(神原達氏)『パブリック・サイエンス・カレッジの留学生としてネパールに滞在中』とあるのを、『早稲田大学アジア学会より派遣され、カトマンズにてネパール近代史を研究中』と訂正。

(二一一号訂正)

誤 正

2頁5段 炊事は初 めてであり、
4頁2段 あかるら あるから
5頁5段 古原初美 古原和美
6頁1段 立山牛王 立山牛王
8頁2段 ↑出た。に出た。
13頁3段 就いて ついで
〃頁〃段 論者 編者
13頁3段 一山もある 一山もある
14頁3段 Kanchen Junga この
↓ Kanchen Junga
15頁1段 マラント マウント
18頁2段 研究所 研究書
18頁3段 溜池が出 溜息が出た
〃 ヒラリー ヒラリー等
等と違った時 と会った時
18頁1段 思っている 思っている
18頁5段 お伝え お伝え

19頁1段 ポストモ プレモンス
19頁3段 約四、八 約六、八〇
19頁5段 ハワン溪 ワハン溪谷
20頁1段 曾根原真 曾根原恵夫
20頁4段 赤井一陸 赤井一陸
7頁5段 木暮祭参会者氏名中に小林幹三郎氏を追加

会報投稿規程

◇会報に原稿をお送り下さい
◇用紙は15字詰を御使用下さい

編集後記

☆校正のミスが多くて恐縮です。名詞や数字の誤記は、後生(校正)おそろべし、と酒落れてもいられません。深くお詫びします。☆本号の原稿をまとめて印刷所へ持参したのが十一月十八日で、その翌十九日に富士の雪崩事故が起きました。岳界の動静に会報は到底ついて行けない気がします。

昭和三十五年十二月二十五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古沢 肇
電話(神田区)八九五二番
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地

◇誤謬脱落がありましたらどうぞお知らせ下さい。
◇会員カード提出に御協力下さい
八十月一日付Vで記入をお願いしましたカードをまだお出しになっていない方は至急お送り下さい。